

篁

北原白秋

青空文庫

序

我が長歌の総てを収めて、此の『篁』を成す。主として小田原の山荘にありて、竹林の
 日夕を楽しみ、移りゆく季節の風と光とに思を寄せたる、そのをりをりの古体を蒐めたり。
 かの山荘はまことに篁の中にありて、その蕭々の音は、常に颯々たる松籟に唱和し、簡
 朴にしてそぞろに幽致にも満ちたりしかど、震災後、大破して繕ふに由なく、ただ辛うじ
 て住むを得たりき。

我が長歌も亦かくのごとし。長歌とは言へども、あながち万葉の古体にもあらず、貧し
 き詩魂は時に新様の我趣を求めて、自ら姿容を破る。もとより流通するところの所縁ただ
 に和歌の一体に繋ることをのみ幸とすべきか。また言ふところ無し。

昭和四年 暮春

白秋

竹と我 序歌

眺めても眺めあきずよ 親しめば親しむがまま 幽けきもありのさながら かかはらず
またさまたげず 竹は竹 我は我ゆゑ 竹がうれしも

言祝

言祝

大君。日の本の若き大君。神ながら朗らけき現人神。青空やかぎりなき。国土やゆる
 ぎなき。万づ世の皇統。皇孫や天津日継。ああ、我が天皇。大君。道の大君。大
 稜威。今こそは依り立たせ、けふこそは照り立たせ。高御座輝き満つ、日の御座ただ照
 り満つ。御剣や御光添ひ、御璽やいや榮えに、数多の御鏡や勾玉や、さやさやし御
 茵や、照り足らはせ。大君。我が大君。現つ神。神ゆゑに、雲の上の生日の光采りてま
 すかも。

最勝閣にまうでて

最勝閣にまうでて詠める

長歌ならびに反歌

風速かざはやの三保ほの浦廻うらみ、貝島のこの高殿は、天あめなるや不二ふたをふりさけ、清見みづみ瀉満干みちひの潮に、
 朝日あさひさし夕日照りそふ。この殿にまうでて見れば、あなかしこ小松むらお叢生むらおひ、辺へにい寄る玉
 藻もいろくづ、たまたまは棹しづさす小舟、海苔のり粗朶そだの間あひにかくろふ。この殿や国の鎮めと、御み
 仏ほとけの法の護りと、言ことよさし築つくかしし殿、星月ほしづくよ夜よ夜空のくまも、御庇みひさしのいや高々に、
 鐸すずの音ねのいやさやさに、いなめのめめの光ちかすと、横雲よこぐものさわたる雲を、ほのぼのと聳たかえ
 しづもる。しづけくも畏すぎ相がた、畏すぐも安やすけきこの土ど、この殿の青あおき蕙いらかの、あやに清すがしも。

反歌

この殿はうべもかしこし白妙の不二の高嶺をまともにご見る

春
鶉

冬ごもり

冬ごもりうらさびぬらし。隣りべは日のあたるよと、萩も枯れ萱も枯れぬと、よろしよと、
見つつぬくもる、吾が和なぎごころ。

反歌

おのづからうらさびぬらし萩の戸のへだての垣も枯れて匂ひぬ

日あたり

つれづれと眺めあかぬを、枯れしとて萩は刈られぬ。ほほけしと薄も刈りぬ。ほのぬくみ
刈りつる人も、うちたばね、かつぎていにぬ。日あたりの、となりの庭の、そのよろしさ

を。

反歌

枯れはてて萩は薄は刈られける日のたむろべのよろしみ来るを

ととのはぬ春

春はまだととのはざらし。土かづく黄の福寿さう、露の臺、萎^{しな}へ葉の霜の苳や、裏藪の小すみれもまだ、^{しもと}枝べのつくつくしまだ、日あたりの枯れし芝生の、^{したも}下萌えもまだ。

をさなき春

土見れば土の香立つを、はなはだし、春をさなし。露の臺いづらにふふむ。つくつくし
 萌え立つやいつ。置く霜のややに浅くも、こぬか雨ややに繁くも、裏藪や、葦さく辺の、
 いまだなじまず。

反歌

隣りべの春もをさなしたき火して梅のつぼみをしたしとを見れ

見え来る春

かにかくにうつらふ冬や、隙間洩る風を寒むみと、破れはてし家にこもると、はららうつ
 雨のこまかに、置く霜の置くと解くれば、ふる地震のふると消につつ、おのづから霞立つ
 日ののどけくなりぬ。

反歌

いつしかとなごに來ぬらし 向^{むか}山^{やま}の地震^{なみ}の壊^くえ土崩^つえかすみつつ

福寿草

冬^{ふゆ}ごもり、こもりあかねど、寒^ふき日は吾^あもちぢまりぬ。春^{はる}まつと妻^{つま}は急^せけども、のどなら
 む家^{いへ}も壊^くえたり。子^こが愛^めづる薄^{はく}葉^は鉄^{てつ}の太^お鼓^こ、その紅^{あか}き片^{かた}面^{めん}剥^むげしに、土^{つち}盛^もりて、せめて植^う
 ゑむと、福^{ふく}寿^{じゆ}草^{そう}霜^{しも}に抜^ぬき來^きぬ、二^{ふた}株^{くわ}三^{さん}株^{くわ}。

反歌

児^こが愛^めづる薄^{はく}葉^は鉄^{てつ}の太^お鼓^こ剥^むがれたり植^うゑて眺^{なが}めむ福^{ふく}寿^{じゆ}草^{そう}のはな

春鴟

おもしろの春や、この朝、花しろき梅のはやしに、をさな鴟もず来てををりける。草餅の蓬よ
 ろしと、黄粉きなこつけ、食みつつきけば、いはけなの鴟や子の鴟。ふふみ音ねの、まだなづむ音ね
 の、うぐひすの鳴まねびをる。頬白のふりまねびをる。しづ枝えゆり、ゆり遊びをる。移り
 飛びをる。

反歌

梅おほきとなりやかたは明るくて花のさかりををさな鴟飛ぶ

あるとき

春鳥の枝に揺る声の、ゆく水のがよふ音の、朝風の松のひびき、夕風の小竹のさゆれの、おのづから我よあはれと、あはれにも恍れて、しらべて、あるべきものを。

反歌

一いきに歌ひ成してぞおもしろきこのごろくやし思ひ凝りつる

のどか

子よあそべ、父も遊ばむ、母呼ばむ、来り遊ばむ。日あたりにつくしも立ちぬ。つくしべに蓬も萌えぬ。枯萱の裏むらさきの、ほのぬくみ、かがやく根にはあなあはれ、白きなづなの花も群れたる。

反歌

うらなごむ春日よろしみ蓬生や花のなづなを踏みて暮しつ

匂だちとみに春めく蓬生の下べのしめり踏めばかなしも

春の草まだやはらかしとりまぜて摘むとためけり子ろが帽子に

つくし

土筆摘み、妻と子と摘み、うすあかき土筆の茎の緑だつその秀ほの粉こなの、かなしとも吾あも妻も摘め、をさな見もしみみ摘みをる、そのをさなさを。

反歌

一つ一つ摘みし土筆をつくづくとまた植ゑてをりもとなをさな児ひと

種子蒔き

鍬入れて、繁しげに篩ふるひて、掻きならす土はよき土。春雨のよべのしめりに、けさ蒔くや、種子はひなげし、金蓮花、伊勢のなでしこ。向日葵は間まをよくあけて、枇杷のべに糸瓜は寄せて、蒔かずしも朝顔夕顔、おのづからまかせたらなむ、垣の根かたに。

反歌

盛る土に足あとつけて子も蒔くと画ゑの種ぶくろ日にかがやきぬ

このごろは

このごろはくつろぎにけり。歌よめばよくもあしくも、墨磨れば濃けれうすけれ、うれしくも恍^ほれて書きけり、かなしくも恍^ほれて書きけり、ただ楽しみて。

反歌

歌ふらくおのれ楽しむものならし楽しみてあらむひとりこもりて

双柿舎 熱海遊草

おもしろの春の小雨^{こよめ}や、うら向けに羽織かぶりて、かつぎ、石いくつ飛び、童^{わらべ}さび、声うちあげて、翁こそ帰り来ましぬ。柿がもと、白梅がもと、かうかうと帰り来ましぬ。先生らしも。

反歌

柿ふたき
双樹

梅いづみもと
五三本

この庭のさましづかなりこさめなが
小雨流らふ

多摩の浅春

造り酒屋の歌

水きよき多摩のみなかみ、南むく山のなぞへ、老杉の三銚五銚、常寂びて立てらくがもと、
古りし世の家居さながら、大うから今も居りけり。西多摩や造酒屋は門櫓いかしく
高く、棟さはに倉建て並め、殿づくり、朝日夕日の押し照るや、八隅かがやく。八尺なす
桶のここだく、新しぼりしたたる袋、庭広に干しも列ぬと、咽喉太の老いしかけるも、か
うかうとうちふる鶏冠、尾長鳥垂り尾のおごり、七妻の雌をし引き連れ、七十羽の雛を
引き具し、春浅く閑かなる陽に、うち羽ぶき、しじに呼ばひぬ。ゆゆしくもゆかしきかを
り、内外にも満ち溢るれば、ここ過ぐと人は仰ぎ見、道行くと人はかへりみ、むらぎもの
心もしぬに、踏む足のたどきも知らず、草まくら、旅のありきのたまたまや、我も見ほけ
て、見も飽かず眺め入りけり。過ぎがてにいたも酔ひけり。酒の香の世々に幸はふ、うま
し国うましこの家ぞ、うべも富みたる。

反歌

大御代の多摩の酒屋の門かどやぐら 櫓 酒の香さびて名も古りにけり

西多摩の山の酒屋の鉾杉は三もと五もと青き鉾杉

餅搗きの歌

武蔵野や多摩のみなかみ、御嶽道みたけみち 弘沢ほつさはの口、春浅き日南ひなたのそとに、餅搗くや爺は杵と
 り、白のベや婆は手に捏ね、ぼたらことこのどにむか対ひる、ぼたらこよゆるにとめぐる。閑しづか
 なるここらの里も、雛祭ちかづきぬらし。御形ごぎやう咲き蓬蕪むかえたり。古りぬれど雛もかざれ
 り。山もあり川もありけり。こもり啼く子ろも居るらし。道みちほり埃ほりしろじろ立てて、吹き
 過ぐと風はさむけど、雲ゆけば日ざし洩れ来て、おのづからうら安の世や、ぼたらこと爺
 は杵とり、ぼたらこと婆は捏ねつつ、水凧すずりする。

反歌

春なれば草の蓬も搗きこめてのどかなるらし餅搗きをる

道のべののどの餅搗きおもしろと見つつあかずも杵の手ぶりを

めぐり見つつ見つつあかずも搗くたびに杵にのり来る餅のふくらみ

搗きたての餅もちひならずとしろき粉の米の粉まぶし手にたたきをる

道のべの春

きさらぎや多摩の山方やまかた、まだ寒き障子あかりどの内、人影の、手に織る機の、ていほろよをさ箴をう
つらしき。立ちとまり、うつらに聴けば、からりこよ、杼ひの鳴るらしき。三みつまた杈またの花咲き

湿る、山の井の、下井の水も滴るらしき。

反歌

障子あかりどにすずろにひびく箴をさの音山辺の春はすでに動きぬ

山かげの懸樋かけひの縁へりの紐氷柱ひもつらら本末もとすゑほそうなりにけるかも

木彫の
人形

月光と魚 支那の木彫人形 その一

爺おぢが張る四つ手の網に、月さしているくづ二つ。その魚のくちびる紅あかき、この魚の背の鰭
青あおき、現うつつとも思もへばつめたく、幻と見れば霧きらひつ。けだしくも息づく物の、水よりは空
や明るあき、水離さかり空やさみしき。春浅はるき潯陽江の、この月の魚。

反歌

月蒼つきき潯陽江の春浅はるしふなべり低ひめ四つ手張はりたる

たださへや月の光は霧きらふらし四つ手に跳はぬる水の江の魚

口あけしぼちりと紅くそめにけり小さき木彫のいつくしき魚

魚売り 支那の木彫人形 その二

魚売りの爺をぢが日永や、ふち広びろの菅の編笠、たよたと担棒おほこかつぎて、はらはらに片手まはして、前籠まへかごに魚かすくなき、後あしの籠魚か多かる。後の籠地にしひきずる、重かるらしも。

反歌

菅笠の爺をぢが日永となりにけりになひの籠かごのうしろさがりに

米と雁 支那の木彫人形 その三

米つくと、杵は踏みゐつ。雁射ると、弓弦ゆづる張りゐつ。足に踏む、をかしかりけり。手にし張る、あはれなりけり。米つきは下べ見てゐつ。雁射るは空べ見てゐつ。とぎまかうぎま。

反歌

米つくとうつらうつらに踏む杵のこなた踏む時かなたあがりぬ

雁射ると弓弦^{ゆづる}ひき放ち^そ反る弓の小手にくるりとかへりたるらし

荒彫の牛 生蕃作品

高砂の牡丹社の子か、命こめ、荒く彫りけむ。つたなけど静立^{しづた}つ牛の、をさなけどゆゆし
 力や。男^をごころよ、ひたぶる恋ふと、下ふかく燃ゆる思の、えは堪へね、なほし堪ふると、
 遊びつつ、遊び彫りけむ、くるしくも寂^さびつつ寂^さびけむ、外^とには見せずも。

反歌

荒彫の木彫の牛のみぎり角ほきり欠きたり思ひかねきや

水仙と菊

〔「水仙と菊」の章に〕

浅春

春はまだ浅き菜畠、白き鶏日向あさるを、水ぐるままはるかたへの、窓障子さみしくあけて、女の童ひとり見やれり、外の青き菜を。

反歌

この春や水車が立つる水だまの早や大きなり芽柳のもと

孟宗と月

孟宗と月

〔「孟宗と月」の章の長歌「孟宗と月」の末尾に〕

反歌

物すごき孟宗藪の月あかりかけるかと思れば騒ぐ葉の影

秋山の歌

〔「秋山の歌」の章に〕

水之尾の秋

この秋よ、雲は白うて、事もなき世にしあるかな。山村のこの水之尾、樋^ひのへりにみそ

菘さきて、みそ菘に水だまはねて、水ぐるまやまずめぐれり、その水みなくち口に。

反歌

水ぐるままはる樋口のかがやくは夕日か水にさしあたるらし

岡の鉾杉

榧と栗

〔「岡の鉾杉」の章の長歌「榧と栗」の末尾に〕

反歌

この寺の老木の栗のいが栗はまたすがれたり榧の木のまへ

櫃は櫃さしも青けど落葉木の栗は栗とて枯れにけるかも

米の白玉

米の白玉

〔「米の白玉」の章の長歌「米の白玉」の末尾に〕

反歌

米櫃に米のかすかに音するは白玉のごとはかなかりけり

童と母

麻布山

〔「童と母」の章の長歌「麻布山」の末尾に〕

反歌

垂乳根と詣でに來れば麻布山子供遊べり日のあたりよみ

母と來て佇み目守る日のたむろ子等が遊びのいつはつるなし

童と母

〔「童と母」の章の長歌「童と母」の末尾に〕

反歌

急に涙が流れ落ちたり母上に裾からそつと蒲団をたたかれ

老いしアイヌの歌

老いしアイヌの歌

アイヌはよ、老いしアイヌ。神アエオイナ、アイヌ・ラクグル（アイヌの臭ひある人）の後、神ながら繫はこの頭かしら、土の体たい、柳の背骨、シネ・シツキ・ピコロクル（眼窩の人）神々の髪の毛の人。彼こそはげに、カムイ・オトプ・ウシユ・グルなれ。

彼アイヌ、眉毛かがやき、白き髯胸にかき垂り、家屋チセの外とに萱畳敷き、さやさやと敷き、厳いっかしきアツシシ、マキリ持ち、研ぎ、あぐらゐ、ふかぶかとその眼凝これり。

彼アイヌ、蝦夷島アイヌモシリの神かみ、古伝神オйнаカムイ、オキクルミの裔すゑ。ほろびゆく生ける屍ライグル。夏の日を、白き日射を、うなぶし、ただに息のみにけり。

彼アイヌ、家屋チセの空見ず、さやら葉の青の長葉の、アイサク・ピヤパ（髯なき稷）フレ・ピヤパ（赤き稷）チャク・ピヤパ（はぜ稷）ヤムライタ・ヨコアママ（藪虱に似し稷）、

また、脚高の熊ペウレツプチセ、檻コ、仔の熊の赤き舌見ず、汗垂らし、拭ひもあへず。

彼アイヌ、老いたる鷺、古り皺み、病み倦んずる者。ましら髯、いつかきアツシシ、マキリ持ち、研ぎ、あぐらゐる、オンコそぎ、心恍れり。

彼アイヌ、よく黙もだし、念じ、かつ、しかく黙もだせり。彼、キム・ヲ・チパスクマ（山の教義）の徒、チクニ・アコシラツキ・オルシユペ（樹の守護の教義）の徒、地上の者、聖シランパの子、黙想者、聖トボチの僕しもベ。彼はかく念ずらし。アトニ・ウエンユク（悪楡）よ去れ。ニ・アシユ・ランゲ・グル（をを汝立木人よ）キサラハ・ランゲ・シヌブル・カムイ（をを汝木の皮の尊き鬼神よ）オー・トイヤン・クツタリ（汝地上に拡張せる者よ）総て善し、吾あは拝せり。吾あは老い、吾あは嘆けり。吾あは白し、早や輝けり。吾あは消えむ、ああ早や、吾あが妻、吾あが子、吾あが弟、吾あが族の、残れる者、ことごとく滅めつせん。オンコ（いちゐ）よ、吾あが削る、紅ベにやは柔き兎しむらの肉なすオンコよ、しかく光らん。

彼アイヌ、老いたる鷺。蝦夷島アイヌモシリの神、古伝神オйнаカムイ、オキクルミスゑの裔。ほろびゆく生ける屍ライゲル。

光り、かつ白き屍^{ライゲル}。彼アイヌ、眉毛かがやき、白き髯胸にかき垂り、巖^{いっ}かしきアツシシ、
 マキリ持ち、研ぎ、あぐらゐる、夜^{よる}なす眼の窩^{くぼ}のアイヌ、今は善し、オンコ削ると、息^{おきな}長^{なが}
 に息^{いぶ}吹き沈み、恍^ほれ遊び、心足らふと、そのオンコ、たたりたたりと削りけるかも。

長歌創作年表

大正五年五月（葛飾にて）

童と母

麻布山

大正六年二月（葛飾にて）

夜の雪

鳥の啼くころゑ

大正十年六月（葛飾にて）

アツシジの聖の歌

米の白玉

犬と鴉

立枯並木の歌

潮来の入江

大正十一年一月（小田原にて）

黎明の不尽

遠山脈の歌

秋山の歌

湯どころの秋

竹と曼珠沙華

竹の林の歌

蝸の歌

岡の鉾杉

榎と栗

孟宗と月

冬の上岨

冬の棚田

荒浪千鳥

落葉行

落葉吟

水仙と菊

竹林の早春

元旦の夜のこと

露の臺

聴けよ妻ふるもののあり

ころころ蛙の歌

大正十二年三月（小田原にて）

造り酒屋の歌

餅つきの歌

道のべの春

浅春

大正十四年二月（小田原にて）

水之尾の秋

大正十二年九月（小田原にて）

竹と我

大正十三年三月（小田原にて）

最勝閣にてよめる長歌ならびに反歌

大正十三年四月（小田原にて）

冬ごもり ととのはぬ春

日あたり をさなき春

見え来る春 福寿草

春鴟 あるとき

のどか つくし

種子蒔 この頃は

月光と魚 魚売

米と雁 荒彫の牛

大正十四年四月（小田原にて）

双柿舎

大正十五年一月（小田原にて）

老いしアイヌの歌

昭和三年十月（世田ヶ谷にて）

言祝

附記 ；以上は潮音（大正五年）三田文学（大正六年）行人（大正九年）大観（大正

十年、十一年）日光（大正十二年、十三年、十五年、昭和二年）改造（大正十三年）行楽（大正十四年）婦人の友（昭和三年）等に発表せられたるところに係る。

なほ「童と母」「麻布山」の如きは葛飾に於て成れりと雖も、その取材に至つては曩の麻布の生活に得たるものなり。

青空文庫情報

底本：「白秋全集 8」岩波書店

1985（昭和60）年7月5日発行

底本の親本：「長歌集 篁」梓書房

1929（昭和4）年5月20日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※「水仙と菊」（「浅春」を除く）、「水郷冬景」、「函嶺の冬」、「孟宗と月」（「孟宗と月」の「反歌」を除く）、「秋山の歌」（「水之尾の秋」を除く）、「岡の鉾杉」（「榎と栗」の「反歌」を除く）、「米の白玉」（「米の白玉」の「反歌」を除く）、「童と母」（「麻布山」の「反歌」及び「童と母」の「反歌」を除く）は底本では「観相の秋」との重複のため省略されています。

※大見出し「水仙と菊」「孟宗と月」「秋山の歌」「岡の鉾杉」「米の白玉」「童と母」、中見出し「浅春」「孟宗と月」「水之尾の秋」「榎と栗」「米の白玉」「麻布山」「童と

母」は底本では見出しの体裁をとっていませんが、ファイル作成時に見出しとして追加しました。

入力：岡村和彦

校正：フクポー

2017年12月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

篁

北原白秋

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>